

ほのぼの

第68号

令和6年

11月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



宝の山におりながら

前住職

今年は百歳以上の人が約九万五千名おられるそうです。人生百年の時代は眼前にあります。現在日本で最高齢者になっておられる百十二歳のご婦人が世界一の長寿者です。この長寿社会を「有難い」と受け取っておられますか。「あんまり長生きをしても、いいことも無いから」と言う人もいます。

各人一人ひとりで思いの違いはあるでしょうが、自分の人生を振り返って「残念だ、私の人生は何だったのか」という思いをいだいたままでこの世の最後をむかえるのは辛いことですし、悲しいことです。

「宝の山に生まれておりながら 手を空しくして 帰っていくつもりなのか。それでいいのか」と問いかける声がわが身に響きます。

最近テレビの特集番組で「ミッドライフクライシス」(中年の危機)という言葉を目にしました。

人間は五十代をむかえるころを第二の思春期というそうです。自分の人生に疑問を感じてくる。「これまで頑張ってきた人生は何だったのか」などと自問自答し、自身の存在価値を問うようになる人が増えていくそうです。心のバランスを失って病院にかかるようになる人も出ていくということです。

ここに私たちが自分の人生を支えている地盤の弱さが現れているわけです。底のあいたバケツに水をいれているようなものではないでしょうか。

私たちは誰でも自惚れの心をもって生きています。「私はひととは違う」というプライドです。人生の最後に至るまで私から離れることはありません。

人生も後半になりますと、体力も能力も落ち、これにともなう気力も若い時のようにはいきません。普通に出来ていたことが普通に出来なくなる。なんでもさっさと出来て人の役に立っていたのに、当てにされていたのにそうではなくなる。職場での定年、人生の最後もやがてくる。徐々に自信が失われて心がうつろになり、虚しさが強くなっていく。

虚しさを実感することは新たな生き方を開くのに重要な過程となります。

私たちはすべてのものが変わっていく無常の世におりながら、自分は変わらない「つもり」で生きてきたことをこの時に知らせてもらったのです。

「つもり」は「当てにならないものを、当てになる」と自分で勝手に思い込んでいるのです。「こんなはずじゃなかった」と自分の足元が崩れることは時の流れの中で明らかになります。

親鸞聖人は「本願力にあいぬれば 虚しくすぐる人はいない」と教えてくださいます。足元が動くとは立ってはおれません。この身は生老病死の世界にあり、虚しさから逃れられませんが、この虚しさの世界から、どんなことがあるうとも、必ず救い取るぞという如来さまの本願力の世界に生きて、お浄土に生まれさせていただきます。



南無阿弥陀仏

仏跡参拝旅行

中川 さなみ

六月二十六日、日帰り研修旅行に参加いたしました。今年度は、まず午前中に大阪府南河内郡太子町にある聖徳太子とその妃、太子の母君の御三方の御霊廟のある叡福寺に参拝いたしました。南大門をくぐると想像を絶する境内の広さに息をのみます。そして金堂にて丁寧な説明をしていただき、宝蔵ではそのひとつひとつに込められた時代背景を感じながら拝観し、感銘を受けました。聖徳太子御霊廟では、住職とともに「太子章」の御和讃をお勤め致しました。令和の今、聖徳太子の「和」の心に改めて触れる思いがいたしました。

「見真大師堂」には、親鸞聖人自ら刻まれたと伝えられる坐像が安置されています。親鸞様が深い信仰のもと参詣された境内をゆっくりと散策させていただきました。

その後、北の御堂とも言われる本願寺堺別院に参

拝いたしました。山門をくぐると本堂内正面には阿弥陀如来、本堂前向かって右には親鸞聖人、左に蓮如上人がお立ちになられているお姿に驚き、思わず「なまんだぶつ」です。蓮如上人ゆかりの御坊にはいくつもの伝承があり、また多くの人に慕われて、今の堺別院へと繋がっていることが良く分かりました。余談ですが、与謝野晶子さんが本堂修復の時に寄付された思いを詠んだ句碑があります。

「劫初よりつくろいとなむ殿堂に

われも黄金の釘ひとつつつ」



天燈鬼・龍燈鬼

新田 光美

信行寺の本堂後方の二河白道の絵画の両脇に木像が置かれています。鬼が頭の上に灯籠をのせているのと、肩に担いでいるのと二体ありますが、私はあれが何というのだろうと見るたびに疑問に思っていて一人悩んでいたのです。ご住職に教えていただくと思ってもみたのですが、いつの間にか時が経ってしまいそのままになってしまった次第です。

先立ってテレビを見ていたところ、二体の木像が映っていたのです。天燈鬼という名前で龍燈鬼と一対のものだそうです。普通鬼は四天王に踏みつけられているものをよく見ますが、この二体は仏教の世界を照らす役目を与えられたものだそうです。

天燈鬼は、二本の角と三つの目を持ち、口を大きく開きやや横目で前方をにらみ、左肩にのせた燈籠を左手で支えています。

龍燈鬼は、腹前で右手の手首を左手で握り、右手

は上半身に巻きついていて龍の尻尾をつかみ、頭上にのせた燈籠を上目づかいににらんでいます。

仏像には色々たくさん由來がありますが、私的に今まではずっと疑問に思っていたことが（皆さんはご存じだったと思いますが）わかってすうーっとしました。



国宝天燈鬼・龍燈鬼立像は、興福寺にあります。鎌倉時代の建保三年（一二二五）に運慶三男が造った阿と吽、赤と青、静と動とが対比的に表現された鬼彫刻の傑作です。信行寺の二体は前住職の弟、仏師浜田勝己が造ったものです。

「仏の世界と私の世界」

夏期特別法座より ①（生老病死）

住職

（八月の夏期法座の法話の内容を数回に分けてご紹介させていただきます。）

仏様と聞かれてまず思い浮かぶのはお釈迦様でしょうか。浄土真宗では阿弥陀様ですけれども一般的にはお釈迦様ですよ。お釈迦様という方は約二千六百年前にインドに生まれられた人間でございまして、天から降ってきたような神様ではございません。人間としてゴウタマシッダールタとして今のネパールにあるルンビニにお生まれになりました。そして王子様として育っていくのですが、人生の中でいわゆるこの私たちの命は歳をとって老いていかなければならない存在なのだ、生まれたらみんなずっと若いままではいけないし、病というものも避けられない。そして生まれたらみんな必ず死んで行かなければならないのだという事に気づかれました。私達は、それはそうですよと、頭で分かるところなのですがお釈迦様は、一人っ子でお生まれになりました父の王から溺愛されて育ったのです。お母様はお釈迦様が生まれてすぐに産後の肥立ちがよくなくてお亡くなりになりましたので、お母様の顔を見たことがないのです。お釈迦

様はずっとお父様の浄飯王とお母様の妹に育てられ、不満のないように、一切けがれたものとか見えないような環境で育ちました。ですから、老人とか病人、そして死人も見たことがなかったのです。しかし、大人になって城の外に出て行った時に一人の老人が杖をついて倒れそうになりながら歩いているのを見まして、人間というのはあのように老いていかねばならないのか、と悩まれます。そしてまた病に苦しみ喘いでいる病人を見まして、あんなに病気で苦しんでいる人がいるのかと、私もまた今は元気だけれども病気になるような苦しみがあのかということに思い悩まれ、さらに亡くなった家族を弔う葬列に会い、人は必ず死んでいくのだと気づき、まさに死というものと正面から向き合われたといわれます。要するに私というものは生まれたら、いずれ老いてさらに病も避けられず、ついには死んでいかなければならないのだということに憂いを感じ、後にブッダと名られていく問題意識のはじまりとなりました。私たちは仏さまであるお釈迦様と同じように生老病死の人生を今おくらしているわけです。みんなそれぞれ老いと病と死というものを抱えて生きていくのでございますが、お釈迦様が私達と違うところは、どうにかしてその問題を解決する道を求めて行こうと決意されたことにあります。それこそが仏教のはじまりになるのです。

次号に続く

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、十二月の言葉の説明をします。



貴方の感じられている
虚しさこそ
眞実の世界への
強烈な憧れなのです

この言葉は、『同朋』（東本願寺出版）の中で、米沢英雄さんが「若き友へ」と題した文章に出てきます。若き青年が一流会社へ就職し三年が経ち「この頃毎日、空虚を感じている」という手紙に対して返信された中の言葉です。

誰でも同じような毎日を送り、日常に生きる意味を見出せない苦悩を感じたことがあるのではないのでしょうか。自分の価値に疑問をもち、虚しく感じることもあります。

同じ一日でも一人ひとり感じ方は違います。例えば、病気により余命宣告を受けた家族の一日とその

他の家族の一日は同じ時間であっても、景色、大切さが違うのではないのでしょうか。

「チコちゃんに叱られる」という番組で「何で歳を取ると一年が早く感じるのか」という話題がありました。大人に昨日の昼食何食べたと聞いても覚えていません。子供に一日あったことを聞くと「友達の〇〇が△して、□になっておもしろかった」などとよく覚えています。これは、大人は日々の感動が少なくなりますが、子供は日々色々なことに感動しているからだと言っていました。

大切にする気持ちや感動しながら送る一日こそ憧れの世界といえます。本当に命を大切にすると日常ということになります。ただそれは、煩惱をもつ人間には最も難しいことでもあります。難しいからこそ憧れを生むのです。

親鸞聖人は比叡山において仏道修行に励まれましたが、迷いの続く日々を過ごされました。しかし、その迷いが法然上人と出会うためのご縁であったともいえます。虚しさを感じたということは、自身のうぬぼれに気づき、本当の自身の姿を知る機会でもあるのです。

日頃の疑問を考えよう

Q 仏像の手を見るといろいろなポーズをしています
が、どんな意味があるのですか？

A 仏像の手の形のことを「印相」といいます。印相は仏が伝えたいことを指の形で表したジェスチャーのようなものといえます。印相を見れば仏の種類を見分けることができます。

印相についていくつか紹介したいと思います。



まず、両手を膝の上で組み合わせる鎌倉の大仏の印相は、定印（じょういん）といえます。大日如来や釈迦如来坐像に多く見られる姿勢で、深い瞑想に入られている姿を表しています。



右手を上げて、左手を下げ、五指を真っ直ぐに伸ばしておられる奈良の大仏の印相は、右手を施無畏印（せむいいん）、左手を与願印（よがんいん）といえます。

施無畏印は相手の畏（おそ）れをなくし、与願印は相手の願いを聞き届けようという姿勢を表しています。



この二つはセットで用いられることが多く、釈迦如来像に多く見られる印相です。

浄土真宗の阿弥陀如来の印相ですが、これは阿弥陀如来特有の印相とされ、来迎印は臨終の際、阿弥陀仏が西方極楽浄土より迎えに来るときの姿とされています。

浄土真宗では「来迎印」ではなく、人々を摂め取って決して捨てないという阿弥陀仏の慈悲の心を表すお姿、「摂取不捨印」といわれています。

親鸞聖人は、臨終の瞬間までみ仏の救いを待つ必要はなく、平生においてすでにみ仏に摂取不捨されているという救いを明らかにされているからです。



浄土宗では、極楽浄土へ往生するにも九種類あるとして、九品往生印があります。



信行寺行事予定とご案内

◇報恩講法要

十一月二十三日（土） 法話 住職

十一月二十四日（日） 法話 前住職

二日間とも午後二時より三時半頃までの予定です。
ご都合に合わせて、一日でもお参り下さい。

◇新春初法座

令和七年 一月五日（日） 午後二時より

お正月をお寺でお迎えしましょう。

ご一緒に年の初めのお勤めをし、その後、
法話をご聴聞ください。

編集委員より

新谷 勝

田舎生まれの私、農繁期には「猫の手も借りたい」と言われるほど大忙しで大変な作業でした。子どもの頃、手に合う仕事は素直に手伝うことは当たり前、家の役に立っていると思えば嬉しい思いでもありました。

ほのぼのの六十七号に前住職のお話「していることはさしてもらっている」の心。我が身を顧みれば、やはり自分中心の生活そのものです。

戦後の高度経済成長期の頃、子育ては妻任せ、自分は仕事優先、長期宿泊出張で家を空ける日も多く苦労させた思いがよみがえります。

十年ほど前の年末、妻は緊急入院、一命はとり止めましたが介護が必要になる闘病生活。半年後入院期限が迫り、我が家に戻り公的介護を受けながら家族の協力を得ながら介護を続けることに。在宅一週間後、嬉しかったか、満足したのか分らぬまま何も話さず静かに命を終え、お浄土へ。

看取りを始めた頃は「出来るだけのことはしてやろう」の心だった。しかし、病状が深刻さを増し、「心配しないで安心してね」と妻に寄り添う心が。長い間家族を守り続けてくれた恩に感謝の気持ちを込め「ありがとう」と家族みんなの送る言葉となりました。

如来さまの仰せに「する」ではなく「さしてもらう」の心だと前住職は話されています。